一葉舟

岡潔

読売新聞社

一葉舟

岡潔

読売[redacted]社

一葉舟

昭和四十三年三月　三十　日　第一刷
昭和四十四年二月　一　日　第五刷

著者　岡潔

発行者　鈴木敏夫

発行所　読売新聞社

東京都中央区銀座三ノ二ノ一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口三ノ三五

製本　協和製本
印刷　凸版印刷

定価　五〇〇円

© 1968 Kiyoshi Oka

一葉舟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

科学と仏教　五
教育を語る　四七
片雲　六三
梅日和　七七
辨栄上人伝　一一七
人という不思議な生物　一三七
一葉舟　一五七
ラテン文化とともに　二七一
あとがき　二九九

装丁　重原　保男

科学と仏教

私の生活に現われた宗教

人はたいてい自然以外に心というものがあると思っている。しかし、自然といえば人の肉体も含まれるから、心は自然の中にあると思っている。それもあちらこちらに閉じ込められて別々にあると思っている。ところが仏教では、心の中に自然があると教えているのである。しかも、こんなふうなぐあいにである。心の中に自然があること、なお大海に一泡の浮かべるがごとし。

自然の中に心があると思おうと、心の中に自然があると思おうと、どちらでもよい訳であろう。ところが、明治以後の日本人は大体西欧の習慣に従ってものを見ているから、前者を理性的と思い、後者を宗教的と思うのである。

私は十五年前までは、自然の中に心があると思ってきた。今は心の中に自然があると思っている。前にどちらと思ってもよい訳であるといったが、この心は刹那の現象として自然を現わしているのであって、これが自分の心だということになると、そのあとが実はたいへんなのである。どんな

ふうにたいへんか、まず、たとえでお話ししよう。

将棋の二上達也さんが先ごろこういう意味のことをいっていた。

——自分は棋譜を切り抜いて大きな箱に入れている。勝ったものはよいが、負けた棋譜は見るのもいやだから、とりあえずこうしてしまったのである。ときどきそれを整理しようとして、取り出して並べて見るのだが、そうすると茶の間は足の踏みどころもなくなるし、なかなか整理がつかなくて、そのまま幾日も捨てておくものだから、ついに家内が「頭のてっぺんから声を出してしまう」。自分は仕方がないから、がさっと、もとの箱に入れてしまう。結局はじめと同じことである——と。(朝日新聞、私の茶の間)

これと同じことであって、たいへんなのは、この心の整理がたいへんなのであって、それを自然に即して説明しようと思うのであるが、それには道元禅師の「正法眼蔵」(岩波文庫、上巻)から言葉を借りるのが一番よいと思う(かぎかっこをつけてあるのが、そのまま借りた言葉である)。

「直趣無上菩提、しばらくこれを恁麼といふ。この無上菩提の体たらくは、すなはち尽十方界も無上菩提の少許なり。さらに菩提の尽界よりもあまるべし」

恁麼とは未知数xというような意味である。これでこの心には一大中心があることがわかる。そのつもりでこの心を整理しなければならない。

「われらもかの尽十方界のなかにあらゆる調度なり。なにによりてか恁麼あるとしる。いはゆる身心ともに尽界にあらはれて、われにあらざるゆゑにしかありとしるなり。身すでにわたくしにあら

ず。いのちは光陰にうつされて、しばらくもとどめがたし。紅顔いづくへかさりにし、たづねんとするに蹤跡なし。つらつら観ずるところに、往事のふたたびあふべからざるおほし。赤心もとどまらず、片々として往来す。たとひまことありといふとも、吾我のほとりにとどこほるものにはあらず。恁麼なるに無端に発心するものあり。この心おこるより、向来もてあそぶところをなげすてて、所レ未レ聞をきかんとねがひ、所レ未レ証を証せんともとむる、ひとへにわたくしの所為にあらず、しるべし、恁麼人なるゆゑにしかあるなり……既に恁麼人なり。何ぞ恁麼事に関せん」

大体わかったが、「あらゆる」というのだから実にたいへんなのである。しかし、肉体は刹那に生滅するが、心の本体は決して生滅しないから、何も急ぐことはないのである。この一生を一日にたとえていえば、今日少しも整理がはかどらなくても、明日もあれば明後日もある。道元禅師はこういっている。

「いかにあらんかこれ過去心といはば、かれにむかひていふべし、これ不可得と。いかにあらんかこれ現在心といはば、かれにむかひていふべし、これ不可得と。いかにあらんかこれ未来心といはば、かれにむかひていふべし、これ不可得と。……またいかなるか過去心不可得といはば、生死去来といふべし。いかなるか現在心不可得といはば、生死去来といふべし。いかなるか未来心不可得といはば、生死去来といふべし」

これまで整理といってきたが、秩序は物質のことであって、心は調和というべきである。道元禅師はこういっている。

「心不可得は諸仏なり、みづから阿耨多羅三藐三菩提と保任しきたれり」

整理されてしまってはつまらない。不調和な部分がなくなってしまえばそれでよいのである。人は普通無意識というが、正しくは心不可得というべきであろう。わからないのはたいてい続きぐあいであるから。

また、そういう心が自分ならば、行為はこんなふうになるべきである。

「果然として仏を行ぜしむるに仏すなはち行ぜしむ」

大体こんなふうである。生活を外から見ると、何か一、二の原理がつけ加わっただけで、別に変わったようには見えないであろう。しかし内から見れば全然別のものになっているのである。私はそれまでと同じように数学の研究をやっている。しかしそれ以後はこうすることによって、自分の心の調和を高めようとしているのである。これが真の道であるが、善、美、妙みなそうであろう。

自分の心の中にすべてがあるのだから、自分のための行為と、他のための行為との区別はないのである。この点は便利である。

この心の全体を調和させようとするとたいへんである。上には限りがないが、一応のところまで行くに、どれくらいかかるかと思って、ちょっと計算してみた。大体千六百年くらいらしい(もとよりこの数字は、大体の尺度を示すためのものであって、あまり正確ではない)。

(三八・九・二二)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

数学を解く英知

私は大学を出てから四十年余り数学の研究をしている。数学の研究というとわからないと思う人が多いかもしれないが、それは既知のことをやると思うからで、研究といえば何だってみな未知のことをやるのである。だから、本当に生きている人が、自分の考えを日々の行為にあらわしているのと、本質において別に変わったところはない。ただ、数学の場合、数学上の発見がなぜできるのかということを、世界の大多数の数学者はいまだに知らないのである。

一九一二年（大正元年）というと第一次大戦の始まる少し前だが、その年に死んだフランスの大数学者に、アンリー・ポアンカレという人がある。「科学と方法」（岩波文庫）という本を書いて、その第一編第三章に数学上の経験を数多くあげて、こんなふうにして発見されるのだが、これが人の頭のどういう働きによるのか、自分にはいかにも不思議だといったのである。

フランス心理学会がさっそくこれに共鳴して、世界のおもだった数学者に問い合わせたところ、結果は大体ポアンカレと同じであった。

かようにして心理学上非常に重要で興味のある問題が確立されたが、欧米人にはいまだに解決の端緒も得られないのである。

しかし、この問題は東洋人には少しも不思議ではない。これは仏教でいう無差別智（むさべつち）の働きなので

ある。無差別智とは人の知情意および感覚に働く力であって、この力の働いていることを、その人自身は少しも意識しないというものである。

これは数学についてだけのことではなく、「昆虫記」（岩波文庫）の著者ファーブルは、こういう意味のことをいっている。昆虫の本能はよく観察すればするほど不思議である。自分はもしまた人に生まれて来ることができたら、続けてここを研究するだろう。しかし、幾代続けて研究しても、ついにこの不思議を解明することはできないだろうと。これも無差別智の働きなのだが、無差別智は欧米流のやり方では解明できないのである。

無差別智のことは東洋人は昔からよく知っている。ただ日本人は明治以後西洋から物質文明を大急ぎで取り入れ、そのなかに住んでしまった。物質文明とは物質によってすべてが説明できるとしか思えないことであって、そのため、明治以前の日本人ならば、すぐにわかっただろうと思われることが全くわからなくなっている。

私は別に、和泉式部が後世を願う仏教的な和歌を詠み、また古事記と医学について書いたが、明治維新の前後に生きた蓮月尼という方にも、それに類した一連三首の和歌がある。

宿貸さぬ人のつらさを情にて　朧ろ月夜の花の下臥し

野に山にうかれうかれて帰るさを　ねやまで送る秋の夜の月

武蔵野の尾花が末にかかれるは　誰が引き捨てし弓張りの月

第一首は観音大慈（大慈とは人に喜びを与える菩薩）、第二首は観音大悲（大悲とは人の悲しみを取り去

る菩薩)、第三首は月読尊(アマテラスオオミカミの弟で、ヨルノオス国をおさめたもう神)を詠んだものであって、だんだん境地が深くなって行っている。第一首は清水谷恭順氏の観音経講話にも出ているが、古神道(自然教が混合する以前の神道)が仏菩薩の道であったことが、これによって明らかである。

ところで、数学の研究は一面からいえば無差別智の働きであるが、他面からいえば大脳の働きである(大脳については時実利彦さんの「脳の話」(岩波新書)を見てほしい)。時実さんの説では、人の血は六十日もたてば変わってしまうし、内臓諸器官も七年半くらいで細胞が変わってしまうが、脳細胞ばかりは人が胎内で母に受けて以後、生涯変わらないというのである。(医学者によっては、そうでないという人もあるが、これは学説の違いではなく、名称の違いであって、他の医学者が脳細胞と呼んでいるものの中には、生まれてからふえるものもあるが、時実さんはそういうものを正常な脳細胞とは認めていないだけの話である)

その時実さんのいう正常な脳細胞と、一般の細胞との数の比率は、大体一人と日本国民全体との比率に等しい。だから、正常な脳細胞一つが日本国民全体の数に等しい一般の細胞を使ってしているのが大脳の働きである。

大脳とはどのような不思議な働きをするところか、このことから推測できるだろう。その不思議な働きが無差別智と呼ばれるものなのである。それで仏教のいうところをよく聞いて、それをご紹介しようと思うのである。

(四一・三・二〇)

大数学者にも限界

私は胃カイヨウのため堺市にある大阪労災病院で外科手術をうけた。二か月ほど入院し、最近退院して、病院公舎の主治医の家で療養中である。私は天性の科学者であって、身辺に変わったことがあると、すぐ観察の材料にしてしまう。それで、どうしてこういうことになったかをお話ししよう。

私は昭和四十年の夏には、「サンデー毎日」に「春風夏雨」を書いていた。いつごろか詳しいことは忘れたが、ともかく夏中に上京して、文部省、法務省を尋ねた。そして帰って第一回の胃カイヨウをした。このときもこの病院のご厄介になったのだが、このときは注射と内服薬という内科的な治療をうけ、一応なおったのである。このとき自分を観察して得た結果を書いたのが、朝日新聞に連載した「春の日・冬の日」である。

その後も三月置きぐらいにこの病院で見てもらっていたが、第二回の胃カイヨウをする二十日ほど前には、別に異状はなかったのである。それでこの二回目の胃カイヨウは二十日ほどのうちに作ったことになる。どういうやり方で作ったかをみよう。

私は上京して、東京都や神奈川県で三人の人に会い、二回講演した。そして超特急〝ひかり〟で帰途についた。その〝ひかり〟が名古屋に着くまでに、私は随想の腹案を立てた。帰ってすぐに素

描してみると、四百字詰めの原稿紙百五十枚になった。その他、新聞や雑誌の新年号のために数編の随想を書き、日本経済新聞の「私の履歴書」のために年内に終わるように録音し、最後に数通の大切な手紙を書き、書き終わるや血を吐いて倒れたのである。

ある日本の医学者（姓名は私の主治医である鯨岡寧さんが知っている）が、次のような非常に面白い実験をした。錐（きり）か何かを犬の間脳に突き刺すと、その胃壁から血が勢いよくほとばしり出たというのである。

私の場合は二度ともこの犬のされたことと非常によく似ている。錐のかわりに、初めは心を激しく労したし、二度目は脳を急激に使ったというだけの違いである。数学することは花崗岩（かこうがん）にきざむようなものだからよいのだが、随想することは大理石にきざむようなものだから、同じ刀を使うと得てしてこういうことになりがちなのである。

ともかく私の作った胃カイヨウは物すごく見事なもので、穴を新旧二つあけたのだが、こんな大きな穴はこの病院でも二度目だという。私は直ちに外科手術を受け、胃を五分の四切り取ってもらい、二十一人の人から輸血してもらって、やっと生命を取り止めた次第である。

私は手術を受けてから二十日間ほどはおとなしく寝ていたのだが、それが過ぎるとまたいろいろなことを始めた。前にいった随想の素描を書きなおすのがその一つ、今書いている随想やこれにひき続くものの腹案を立てるのがその二つ、数学するのがその三つである。

どんなふうに数学しているかというと、私はフランスにいた一九二九年（昭和四年）いらい、思い

つくことをレポーティング・ペーパーに書いて日付けを入れ、それが手ごろの厚さになると大きな封筒に入れ、表題と日付けを書き、さらにそれが手ごろな厚さになると保存用の大封筒に入れ、表題と日付けを入れて保存して置く、という研究法を続けているが、大体二年間に二千ページほどたまる。それを二十ページほどの論文に書いて仏文で発表する、ということを続けてきたのである。論文一ページの背後に百ページの紙があることになる。もっとも近ごろになって、以前ほどは書かなくなった。それは私が私設数学研究所を持つことになって、そのほうに力の過半をさかざるを得なくなってしまったためである。

ところで、私が今ここでやっている数学であるが、ここには参考書は一冊もないし、例の封筒も少しは持ってきてもらったが、全体に比べるというに足りない数である。それで今は赤手空拳で数学しているようなものであるが、それがひどく私の気に入ったように思う。こういえば、それはどのような数学かということになるが、それに答えることはむずかしい。なぜならあなた方は数学というものを知らなさ過ぎるからである。それで、一人の数学者の話をしよう。

ゲオルグ・フリードリッヒ・ベルンハード・リーマンという人があった。大数学者中の大数学者である。スイスで生まれ、ドイツのゲッチンゲン大学で教鞭をとった。地位は死ぬ少し前に助教授になったか、あるいは講師のままで一生を終わったか、どちらかである。リーマン一辺倒の同大学のフェリックス・クライン教授のいうところによると、当時二十五歳のリーマンは、既にカナリアのようにさえずっていた、ということである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com